

名刀蛇に化ける

むかし伴三郎という落人が長畑にすんでいて、坂壁山を越えて川俣町に絹糸売りをしてくらしていた。川俣町で酒のんでの帰りみち、女神の太左衛門の裏に「おみたらせ」と名づける清水が、岩の間からこんこんとわいているので、そこでしばらく休んだ。帰ってから、うっかり腰のものを忘れてたことに気がつき「ばあさん、困った。大切な腰のものをどこかに忘れてきたでは。蛇丸という名刀だったがなあ。」とがっくり力がぬけたようになり、それでも気をとり直し坂壁山まで行ってさがしたが見つからない。一方、太左衛門の女中が水くみに「おみたらせ」に行ったら、大蛇がいたのにびっくりして「たいへんだ、大蛇がいた。」と息せききって報告した。太左衛門はそれを見ようとかけて行つたが、姿は見えず一振の太刀が清水の井戸のわきにあつた。よく見ると正宗の銘があり、この刀はただものではないと思つた。

あとで伴三郎はわけを話して返してもらつたが、その後、その刀は上小国のある家に入り、うぶすなの祠の宝物として祀つてあつたが、大東亜戦争となり刀もともに出征したが、とうとう戦地でなくしてまつた。これは二二尺三寸の太刀だったという。